

夏の暑さが和らいで、世界の色が変わりはじめようとしている。
肌寒い日も増え、日の入りが早くなり、そろそろ薬屋を閉めようとしたときのことだった。
フォルを抱えた母親がやってきて、話を聞いてから彼を預かった。

「どうしたの？」

「急患だよ」

フォルを診察室のベッドにゆっくりと寝かせた。

「フォル……」

「二日も熱がさがらないんだって。お母さんにはうちで診るからって言っちゃったけど、よかった？」

「ええ。大丈夫。対応してくれてありがとう」

「フォル、辛そうだな……」

「いつもの^{げねつ やく}解熱薬が効かなかったのね」

^{ひたい}額、目、口、首。

手慣れたように、ルルが^{しよくしん}触診していく。

「解熱薬ってほかにも種類があったよね」

「ええ。でも、まだ幼いフォルに飲ませることができる薬は、限られているわ。調整が必要ね」

「とりあえず、材料を採ってくるよ。薬草の書き出しをお願いしていい？ その間、フォルは俺が見てるから」

「わかったわ。ちょっと待っていて」

数分後、ルルは薬草のメモを俺に手渡す。

それを見ながらすぐに採取して、机に並べた。

「いつも飲んでる薬は効かなかった……」

「より強力なものは……、だめなんだよね」

「フォルの年齢を考えるとね」

「ルルを待ってる間、フォルの様子を見てたけど、熱が出てるのに汗はかいていなかったよ」

「じゃあ、発汗^{はっかん}作用^{さよう}のある薬草を中心にして……。あと、喉も腫れていたわね」

「炎症を抑える効果がある薬草、ほかにもあったと思うから採ってくるね」

「お願い」

ふたりでばたばたと調薬の準備をする。

そして、相談しながら作った薬をフォルに飲ませて、様子を見ることになった。

「はあ……」

「お疲れさま」

「ツバメもありがとう。これで回復の兆しが見えなかったら……、」

「大丈夫だよ、きっと。フォルと自分の薬を信じよう」

「……そうね」

「それよりさ、俺たちも少し休もうよ」

そう提案してからキッチンで紅茶をいれ、ふたりで診察室に戻った。

「フォルって、ずっとこういう感じなの？」

「ええ。赤ちゃんのころから何度も熱を出していて……ずっとうちにかかっているの。でも原因はわからないのよ」

「なんで熱を出しちゃうかわからないってこと？」

「そう。虚弱^{きょじやく}体質で、ちょっとでも無理をするとすぐに熱を出してしまう、ってことしか……。そのたびにうちで解熱薬を処方しているの」

「もう、治らないのかな」

「それは……。わからないわ。大きくなるにつれ、良くなっていく例もあるし」

「そっか……。絶対に病気が治る、魔法みたいな薬があればいいのにね」

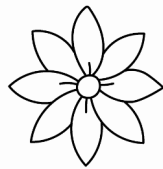
ルルは紅茶を飲んだあと、少し間をおいてからささやくように口を開いた。

「魔法……」

「あ、ねえ。もしも魔法が使えるなら、ルルはどんな魔法を使いたい？」

「え？」

「たまにはこういう夢みたいな話をしてもいいかなと思ってさ」



「あ、フォル、汗かいてない？」

「本当だわ。薬が効いたみたい」

それから数時間、ルルと交代でフォルの様子を見ていく。
やがて、目を覚ましたフォルの顔色は良く、胸をなでおろした。
もう夜が明けようとしている。



早朝、フォルの母親が尋ねてきたので、説明をして薬を手渡すと深いお辞儀をされる。

母親とともに帰っていくフォルを入口で見送ったあと、私たちの口から大きなため息がこぼれ出た。

「はあ。よかった、フォルが元気になって」

「ええ、本当に……」

「でも、原因がわからないっていうのは、本当にこわいね」

「そうね……」

「いつか、フォルの原因に効くような薬ができればいいな」

「……それは薬師^{くすり}の役目であり、課題ね。がんばらなくちゃ」

「ルルは十分がんばってると思うけどな」

「まだまだよ」

ツバメの言葉に、私はため息をついた。

「けど俺、こんな経験初めてだ」

「え？」

「いつも採取だけだったからさ。思えば、配達もそうだし、ここに来てから患者さんと触れ合うことが多かったよ」

彼の瞳は、空に向けられた。

朝焼けの光が、瞳の中で静かに揺れる。

「自分の育てた薬草が薬になって、それを飲む人がいる。誰かの健康を支えているんだってこと、リーファにきてすごく感じるようになったよ」

「ツバメにとって『薬草』って、どんなものだったの？」

問えば、ツバメは少し、目を伏せた。

「薬草でも花でも、植物であることには変わりなかったよ。でも今は……。今は、薬草は『誰かのためのもの』って思えるようになった。今までは育てるのが楽しかったし、どちらかという自分のためだったかな」

こんなにも真剣な表情は初めてで——そのまなざしが、彼の言葉が本心だってことを教えてくれる。

「そうやって変わっていけるあなたならきっと、誰かを支える庭師になっていけると思うわ」

「——そうなれたらいいなと、思うよ」

そう言って家へ入ろうとするツバメの服を、ひいた。

「ルル？」

「……いいえ、本当はもうなっているのよ。ツバメ。今日は本当にありがとう。あなたがいてくれて、とても、心強かった」

目を丸くしたツバメは、口元を手で隠した。
珍しく顔を逸らしたので、不思議に思って彼のあとを追う。

「待って」

肩をつかまれ、制止された。

「もしかして照れてるの？」

「もう、いいから……」

ツバメの耳が、ほんのりと赤く見えて。

今まで見たことのないツバメの表情に、私の心も少しだけくすぐったくなった。